

最初に全体を見てみましょう【写真①】

梵鐘は人々に時を告げ、また法要の時などに撞かれ、お寺で行事があることを知らせます。この梵鐘は飛鳥時代後期（7世紀後半）の鋳造と考えられ、わが国に現存する最古の梵鐘と考えられています。

中央やや下に蓮華の文様が見えます。これは撞座といい、ここを撞木で撞きます。蓮弁は文様のないシンプルな花弁（素弁）です。一番下に下帯と呼ばれる帯がめぐらされ、ここにパルメット唐草文様が表されています。上部に目を移すと突起が整然と並んだ区画が見えます。この突起は乳といい、響きを良くするための工夫と考えられています。全部で60個あります。乳の上には鋸歯文（ノコギリの歯のような文様）をめぐらした上帯があります。そして、釣るための龍頭は二つの龍の頭が鐘をくわえた姿で表され、首には火焔が立ち上っています。わが国の梵鐘の中では細身で、すっきりした形です。

時代の特徴が見られる部分は？

・撞座と龍頭の穴の方向が同じです・・・平安時代半ばより撞座と龍頭の穴の方向が90度ずれるものが現れます。この梵鐘は古いスタイルです。

・龍頭の火焔文様・・・五本の炎が細く立ち上がり、炎の根元には瘤のような隆起があります。飛鳥時代（7世紀）の作と考えられる玉虫厨子（奈良・法隆寺）の金具の文様とよく似ています。【写真②】

・上帯の鋸歯文・・・7世紀後半に瓦などに多用されました。

【写真③】

・下帯のパルメット唐草文様・・・飛鳥時代に流行した文様です。韓国・益山の帝釈寺址出土の軒平瓦（百済、7世紀）によく似た文様が見られ、百済系の文様と考えられます。

【写真④】

いつごろの製作でしょうか

文様の特徴から、飛鳥時代後期（7世紀後半）の鋳造と推定されます。鎌倉時代に書かれた『建久御巡礼記』によれば、當麻国見は當麻の地に「辛巳の年」に當麻寺を建立したと記されています。辛巳の年は西暦681年と考えられます。梵鐘の様式はまさにこの時代のもので、當麻寺の創建期の姿を伝える貴重な遺品です。今日、わが国に伝わる最古の銘文を有する梵鐘は、698年の銘がある京都・妙心寺の梵鐘です。當麻寺の梵鐘はそれより10年ほど古い、わが国現存最古の可能性が高い作品です。



①国宝・梵鐘 當麻寺



②龍頭



③上帯の鋸歯文 (部分)



④下帯のパルメット唐草文様(拓本)『梵鐘実測図集成』  
(奈良国立文化財研究所)より転載